

## 2 第1学年の取り組み

### (1) 算数チャレンジの取り組み

時 期	内 容
1 学期の初め頃	・算数チャレンジの目的と方法を伝える。 ・教科書の音読を中心に、宿題として算数チャレンジに取り組みさせる。
1 学期の中頃	・音読にプラスして問題が解ける場合は、チャレンジするようにさせる。
2 学期初め頃	・算数チャレンジの目的と方法を再確認し、宿題として継続して取り組みさせる。
2 学期の中頃から終わり頃	・算数チャレンジをしていることを前提とした授業の導入と学習の振り返りを行うことを少しずつ定着させる。
3 学期の予定	・算数チャレンジの目的と方法を再確認する。 ・算数チャレンジの方法を少しずつ2年生のレベルに移行していく準備をする。

### (2) 算数チャレンジ・数学的表現活動の工夫に取り組んだ成果 (◎) と今後の課題 (●)

- ◎児童一人一人の理解度に差はあるが、その時間に学習するところを音読していることで、ある程度学習内容がわかっている状態で授業に臨むことができ、習熟の時間を確実に設けることができた。
- ◎導入から一人学びの過程が短くなり、テンポ良く授業を進めることができる単元が多くなった。
- ◎算数チャレンジをしたことで、授業がよくわかるようになったと回答した児童が多くなり、全体的に学習意欲が上がった。
- ◎授業の始めに、算数チャレンジの理解度を3段階で表出させるようにした。十分理解できたと思ったら「A」、概ね理解できたと思ったら「B」、理解できなかったと思ったら「C」と判断の基準を示し、児童に挙手で表出させた。算数チャレンジの大まかな理解度は把握できるようになった。また、算数チャレンジの理解度を基に児童同士の交流や個別指導に役立たせることができないかと考え、「A」を青、「B」を黄、「C」を赤とし、色カードを机上に提示させるようにした。(赤、青、黄は信号機の色に例えている。) その後、交流場面ではカードを基に考えを交流する姿が見られるようになり、赤のカードを提示している児童には、すぐに個別指導ができるようになった。色カードの提示は、算数チャレンジの理解度を教師が把握することにも効果的であった。
- 多くの児童が算数チャレンジに取り組んでいる一方、数名程度の児童は算数チャレンジに取り組めていない。1年生の児童に声を掛けるだけでは改善しないと感じるので、通信等で保護者への協力を定期的に促す必要がある。
- 自力解決する場面を充実させる必要がある。児童が考えることを楽しむような発問や単元構成を工夫していくことが大切である。

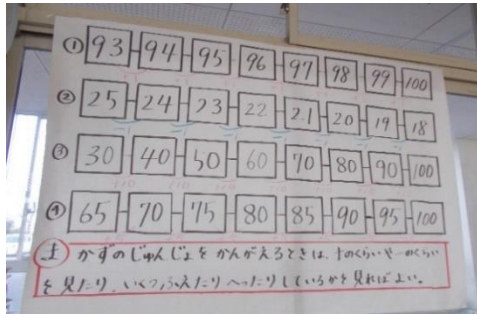
(3) 目指す児童の姿として参考となる資料

【既習事項の掲示物】

繰り返し触れる環境づくりをしておくことで、児童同士で知的な会話が生まれるきっかけとなり、授業の中でも大切なことが浮かび上がってくる。(資料1・資料2)



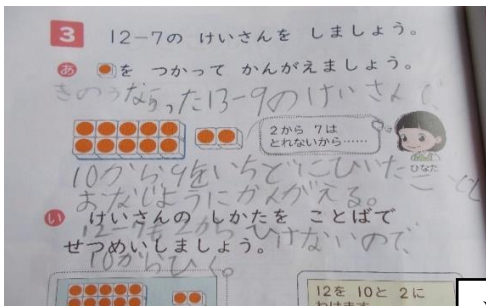
資料1



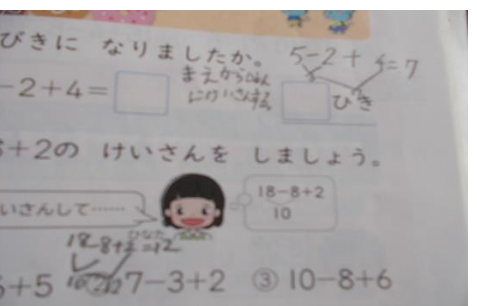
資料2

【算数チャレンジをした教科書】

家庭学習で問題を解いたり、自分の考えを書き込んだりすることができている。(資料3・資料4)



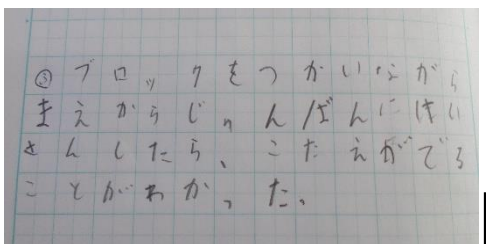
資料3



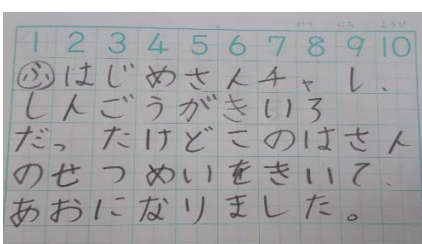
資料4

【授業の振り返りを書いたノート】

算数チャレンジを行った良さや、自分の理解度が授業前の算数チャレンジの段階ではB評価だったものが、授業後にはA評価に変容したことを振り返りの段階で明記することができている。(資料5・資料6)



資料5



資料6

【交流タイム】

一人学びで解決した問題の考え方を児童がお互いに説明し合うことができている。(資料7・資料8)



資料7



資料8